

天文学的文獻目録編輯委員會の新事業

委員 山本一清

國際天文同盟 (International Astronomical Union) の第5委員會、即ち“著作文書分類委員會” Commission des Analyses de Travaux et de Bibliographie は、スエーデン國 Lund 天文臺長 K. Lundmark 博士を委員長とし、ひろく天文文獻に關する研究を續けてゐるが、中にも過去數年來ベルギー國ユクル天文臺長 Stroobant 博士の首唱により、1881年から1898年までの18ヶ年間に發表された全世界の天文学的文獻の目録と概要記事を編輯する大事業が、去る1936年七月ストロバン博士の逝去により、中絶の形となつてゐるのを遺憾とし、昨1938年ストックホルムで開かれた同盟第6回總會で、新たにベルギーの Jean Pelseneer 博士をストロバン博士の後繼者とし、尙ほ委員を世界各地から増員して、此の事業を續けることとなつた。

去る1939年七月3日ベルゼネール博士より發せられた回狀によれば、此の事業のために選ばれた委員は、E. M. Antoniadi (佛), T. Banachiewicz (波), A. J. Beer (英), S. Beljowsky (露), N. Boneff (ブルガリヤ), P. Bourgeois (白), J. F. C. Cox (白), da Costa Lobo 伯 (葡), E. Delporte (白), S. A. de Mayolo (秘), Am. Dermul (白), F. de Roy (白), Pio Emanuelli 師 (伊), Franz Flury (瑞西), R. Furuhielm (フィンランド), Joaquin Gallo (メキシコ), W. Hartner (獨), C. H. Hins (蘭), Jozsef Jelitai (ハンガリ), A. Kopff (獨), K. Lassovszky (ハンガリ), Kr. Lous (諸), R. Madwar (埃), S. Mauderli (瑞西), Voislav Michkovitch (ユーゴスラヴ), N. V. E. Nordenmark (瑞西), Daniel Norman (米), Ernst Öpik (エストニヤ), Stavros M. Plakidis (希), V. Riives (エストニヤ), Luis Rodes 師 (西), Migvel Selga 師 (比), V. G. Siadbey (ルマニヤ), Paulius Slavenas (リトワニヤ), E. Strömgren (丁), S. D. Teherany (白), H. von Klüber (獨), 山本一清 (日), F. Zagar (伊) の39名で、委員長 Pelseneer 氏と共に、總計40名である。

さて、此の委員たちが擔當するのは、前記した通り、1881年から1898年まで

の18ヶ年間の天文文献である。1880年以前のものは、さきに Houzeau-Lancaster 共著の文献目錄が完成してゐるし、又、1899 年度以後は、ドイツ國の計算局から毎年出版されてゐる *Astronomische Jahresberichte* に全部が含まれてゐる。従つて、前記18ヶ年間のものだけが未編輯として残されてゐるのである。1881年より1898年までと言へば、即ち我が日本では明治14年から明治31年までであつて、日本から出版された天文文献は餘り多くない。しかし、最も廣く、出来るだけ漏れなく文献を集めるため、日本だけで数名の協力者を募りたいと自分は考へてゐる。尚ほ、40名の委員の大多數は歐洲に居る人々で、東洋方面は Selga 師と自分と二人きりであるから、支那や朝鮮方面の文献は、是非自分等が責任を持たなければならないと思つてゐる。但し、インドは全く自分には齒が立たない。(天界第211號第11頁参照)

新 刊 紹 介

飯島忠夫博士著 “支那古代史と天文學” 昭和14年2月、東京恒星社發行 3圓60

同 “天文曆法と陰陽五行説” 〃 5月 〃 〃 〃 4.20

E. ハブル氏原著、相田氏譯 “宇宙の實相” 〃 7月 〃 〃 〃 1.80

飯島博士は今般續けさまに二つの著書を公にされた。“支那古代史と天文學”の方は、大正11年以來昭和12年に至るまで種々の刊行物で發表された邦文英文合せて11種の論文を編輯されたもので、全巻を通じ、博士の獨創的意見が澤山載せられ、しかも其れ等が原論文の訂正等をも含んでゐるため、全く up-to-date の清新さを以つて讀者を惹き、中には、新城増本兩博士の意見を比評されたものもあつて、頗る興味をそゝる。“天文曆法と陰陽五行説”の方も亦同様に、明治45年以來昭和12年までに發表された10種の論文を編輯したもので、之れ亦、必要な訂正が加へてあり、卷末にはジカエー天文臺發行の支那星圖が附いてある。既刊論文集であるため、通讀して見ると、同一書の中にさへ、重複や、繰り返しがあつて、少々迷惑な點もあるが、之れは寧ろ、統制された一巻づつとしてでなく、讀者が始めから之れを論文集として理解し、讀みたい部分を拾ひ讀みをする心持ちで居れば、決して不愉快なものではなく、却つて便利である。論敵新城博士の死なれたあとだから、飯島博士の論文を讀んで、少